

学位論文審査の要旨

		要 旨
学位申請者	方 穎琳 【比較社会文化学専攻 平成22年度生】	<p>本論文は、日本語を媒介言語とする接触場面における中国人日本語学習者のコミュニケーション方略 (Communication Strategies, 以下「CS」) の実態を解明し、中国人学習者を対象とした日本語会話教育への示唆を得ることを目的とした。応用言語学及び社会言語学の視点から分析することを通じて、日本語習熟度が異なる学習者が進行中のコミュニケーションで遭遇する意味伝達の問題の特及び問題を修復するための CS の特徴の一端を明らかにした。すなわち、1) 習熟度の向上に伴い、意味伝達の問題の総数が減少する、2) 習熟度に関わらず、「発話産出の問題」が最も多く現れ、メッセージの成立及び伝達はいずれの発達段階の学習者にとっても困難が生じやすい、3) 理解と産出のいずれの側面においても、語彙的知識の不足・欠陥に起因する問題が多い、4) 学習者が意味伝達の問題を修復するために行った調整について、習熟度に関わらず、理解や発話産出の問題が生じた際に、学習者は単純調整と複合調整の両方を行う傾向にあることなどである。さらに、効果的な CS 使用のあり方を提示した上で、明示的な CS 指導を試み、その有効性を確認した。</p> <p>審査は左記 5 名の審査委員により行われた。第一回審査会では本研究により接触場面で生じた意味伝達の問題を解決するために中国人日本語学習者が使用した CS の特徴の一端が明らかにされた点、「理論研究」「実態調査」「現場指導」という観点から研究を組み立て日本語学習者の CS 使用の特徴及び教育への応用について考察した点などが高く評価された。しかし、語句の定義の不明な箇所や研究方法の記述が分かりにくいなどの指摘がなされた。第二回審査会ではこれらについて適切に修正が行われていることが確認された。</p> <p>最終試験を兼ねた公開発表会においては、明快かつわかりやすい発表がなされた。また参加者や審査委員からの質問にも真摯な姿勢で的確に応答し、本研究が中国の日本語会話教育のみならず異文化間コミュニケーション教育においても示唆に富むものであるという高い評価を得た。以上から、最終試験に合格し、博士 (人文科学:Ph. D. in Applied Linguistics) として認定するに値すると判定した。</p>
論文題目	日中接触場面における中国人日本語学習者の コミュニケーション方略の研究	
審査委員	(主査) 教授 佐々木 泰子	
	教授 加賀美 常美代	
	教授 伊藤 美重子	
	助教 西川 朋美	
インターネット 公表	○ 学位論文の全文公表の可否 (可 ・ ⊖) ○ 「否」の場合の理由 ア. 当該論文に立体形状による表現を含む イ. 著作権や個人情報に係る制約がある ⊕. 出版刊行されている、もしくは予定されている エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、 もしくは予定されている オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている ※ 本学学位規則第 24 条第 4 項に基づく学位論文 全文のインターネット公表について	

